

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2024年 7月 1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職名・学年 博士後期課程・2年

氏 名 野田 昌裕

助成の種類	令和6年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	10th Hellbender Symposium			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	The fossil record of giant salamanders from the Pliocene and Late Pleistocene of Japan			
開催場所	アメリカ合衆国 サウスカロライナ州 クレムソン大学			
渡航期間	2024年 6月 16日 ～ 2024年 6月 22日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円		
	使用した助成金額	350,000円		
	返納すべき助成金額	0円		
	助成金の使途内訳	費目	金額(円)	
		航空運賃	350,000	
		宿泊費		
		滞在費		
学会参加費				
その他				
	以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 歴史的な円安の影響もあり、経済的な理由で海外渡航が難しい大学院生にとって、本助成は本当に有り難い制度でした。必要な書類の量も少なく気軽に申請できることに加えて、支援額も最高35万円と充実しており、使途の制約も少ないことがよかったです。私は6月の渡航だったのですが、助成金の振り込みなどの対応も迅速で、大変助かりました。この度は本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。			

成果の概要 / 野田昌裕

1. ヘルベンダー・シンポジウムについて

今回報告者が参加した第10回ヘルベンダー・シンポジウム(10th Hellbender Symposium)は、2024年6月17日から20日にかけて、アメリカ合衆国・サウスカロライナ州のクレムソン大学で開催された。本シンポジウムは、ヘルベンダー(アメリカオオサンショウウオ)に特化した専門集会で、研究者や技術者等の学術交流を主な目的としている。2003年から隔年で開催されていたが、COVID-19の影響で長らく延期されており、5年ぶりの開催となった。今回は、ヘルベンダーの繁殖生態、年齢と成長、保全管理などに関して、口頭発表25題、ポスター発表10題の発表が行われた。また、会期中には保全に関するワークショップや観察会も企画され、ヘルベンダーの保全について活発な議論が交わされた。

2. 研究発表と参加の成果

報告者は学会2日目のポスターセッションにおいて、日本から産出した2種類のオオサンショウウオ化石について「The fossil record of giant salamanders from the Pliocene and Late Pleistocene of Japan」という題目で発表した。現在、オオサンショウウオ科は2属が日本と中国、そしてアメリカの河川域のみに生息しているが、かつては湖沼や陸上にも適応した化石種が存在していたこと、また化石記録の空白を埋める重要な化石が日本から発見されていることについて発表した。本シンポジウムのポスターセッションのコアタイムは1時間設けられていたこともあり、多くの参加者に発表を聞いていただき、保全と進化史を絡めた質問など様々な角度からの質問を受けた。保全に関する発表が多い中で、化石や進化史について興味をもってもらえるか少し懸念していたが、予想以上に反響があったため、多くの方の関心を集めることができたのではないかと考えている。報告者にとっては今回が初の国際集会への参加・発表であり、自身のキャリア形成においても有意義なものとなった。

また各セッションやフィールドでの観察会を通じて、日本では行われていない生息域外保全における管理技術をはじめとした保全に関する多岐にわたる情報やアイデアを得ることができ、さらに現地の関係者たちと直接議論できたことは何よりの収穫となった。今回のシンポジウムで得た知見を日本におけるオオサンショウウオの保全活動や研究にも反映させることで、その質や内容をより充実させていきたいと考えている次第である。

3. 謝辞

歴史的な円安の影響もあり海外への渡航が困難である状況にもかかわらず、この度の国際研究集会に参加できたのは、京都大学教育研究振興財団による助成があったからに他ならない。今回支給していただいた助成金は、現地までの渡航費として使用した。自身の研究について英語で発表し、国外の研究者と交流する貴重な機会となった。心より感謝申し上げる。